

いまでも残る鍼灸院の建物

医院の創設は平安時代にさかのぼるという

大阪市の地名についての話である。クイズで出題される大阪市内の難読地名では、喜連瓜破、杭全、遠里小野、放出などが有名だが、難読とは言わないまでも、道修町、井池、立売堀、靱も読みにくいようで、道修町を「どうしゅうちょう」と発音されると、「どうしましょう」と不安になる。

語尾に付く「町」の発音の仕方も色々あり、船場では原則的には、淡路町、平野町、博労町というように「まち」で発音する。島之内も、旧町名では竹屋町、問屋町、南綿屋町など「まち」である。江戸八百八町の東京は神田鍛冶屋町のように「町」は「ちょう」だが、島之内では同じ鍛冶屋でも鍛冶屋町など「まち」であった。例外は、大宝寺、鰻谷など東西に分かれた町で、「大宝寺東之町」「鰻谷西之町」のように最後に町をつけて区分した。

町名では、読み方だけではなく、命名の由来で感心させられるものも多い。今回取り上げる、近鉄南大阪線の駅名である東住吉区の「針中野」がそれだ。

私は「針中野」の駅名の“針”の字が気になっていた。地名にある“針”は開墾を意味する“壘(はり)”に通じるらしく、愛知県の旧国名・尾張も「小壘(おはり)」によるという説がある。一方、“中野”という空間的な広がりを感じさせる言葉と“針”という尖ったイメージが重なって、私はヴァン・ゴッホが描いたような尖った糸杉が広場に祀られているのでは、と勝手な妄想を膨らませていた。

実は「針中野」の名の由来は開墾地の“壘”ではなく、針葉樹が祀られていたわけでもない。平安時代以来の歴史を持つと伝えられ、現在もこの地で治療をつづけている中野鍼灸院に由来すると聞いて驚いた。

大阪市や東住吉区のホームページによると、中野鍼灸院は、平安時代初期の延暦(782~805)年間の頃に設立されたという。「中野降天鍼療院(ナカノアマクダルハリヤ)」が屋号で、弘法大師空海とも関係があり、宝暦13(1763)年の「摂津平野大絵図」にも「中野村小児鍼師」と記される。

大正3(1914)年に南海平野線が開通した時には、駅から鍼灸院まで7か所の道辻に、「はりみち」「でんしゃのりば」と彫られた石の道標が建てられた。

さらに大阪鉄道(現近鉄南大阪線)の開通に中野家41代目当主が尽力し、お礼として大正12(1923)年の開

通時に最寄りの駅名を「針中野」としたといわれる。モノレールに「阪大病院前」があるように、利用者の利便性や治療院の公益性が認められたのだろう。昭和55(1980)年、付近の地名が再編された際、駅名から東住吉区針中野の地名も誕生した。

現存する鍼灸院の建物は、江戸時代後期から明治の建築で、平成29(2017)年度には「大阪市地域魅力創出建築物修景事業」で改修され、令和元(2019)年に国登録有形文化財となった。

修景事業での専門家のコメントは、治療が行われる「鍼の処」の外観は当初の雰囲気をよく残し、「鍼」「なかのはり」の看板がある門や「旧応接処」、二棟ある蔵が変化に富んだ景観を構成し、同家の格式を示しているとする。

修景完了後、市庁舎や東住吉区役所でパネル展が開かれ、町歩きの「はりみちあるき~「中野鍼」の修景建物解説と周辺の旧跡、庚申街道めぐり~」も催された。

体に打たれた鍼が効くことを響くというが、地名ひとつをとっても、市内には地域に密着した面白い話がまだまだあり、まちを生かし、歴史や伝統を守ろうとする人の動きもまた、奥が深くて心に響く。



「でんしゃのりば」から「はりみち」をたどっていくと…



鍼灸院に掲げられた「なかのはり」の看板

筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室(現・大阪中之島美術館)から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人ー」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ 一増殖するマンモス/モダン都市の現像ー」(創元社)など。